CAUA シンポジウム 2016 全体講評
「ICT システムの運用について考える」

小野 成志
学校法人根津育英会武蔵学園理事、CAUA 会計監事

大学における ICT システムの運用は、古くから大きな課題として認識されてきながら、今日においてもなお新しい課題であり続けている。

基調講演を頂いた、電気通信大学情報基盤センターの高田昌之氏の「大学情報センターの運用と課題」は、この古くて新しい問題を端的に描き出した。国立大学の情報基盤センターでは、毎年度削減される運営交付金の影響を強く受ける。年々厳しい対応を求められるセキュリティ対策や情報基盤の安定運用の実現のためには、一筋縄では行かない様々な工夫が強いられる。高田氏の、具体的な工夫にまで踏み込んだ基調講演は、参加者にとっても有意義なものとなった。

引き続いて行われた、さくらインターネット株式会社の滝島繁則氏の「研究室サーバーのクラウドへの移行」では、クラウドサービスへの研究室サーバーの移行をすすめることで情報基盤センターの管理負荷を減ずることが出来る事例の紹介が行われ、EMC ジャパン株式会社の竹ノ内宏光氏の「データ保護の最新動向」では、遠隔バックアップにおけるクラウドの活用事例が紹介された。いずれも基調講演で示されたように、情報基盤の運用に悩み続ける大学には有用な最新のサービスの紹介となった。

この後、「ICT システム運用の未来」と題してパネルディスカッションが開催された。まず、パネリストとして、埼玉大学情報メディア基盤センターの小川康一氏、早稲田大学基幹理工学部情報理工学科教授で CAUA 会長の後藤滋樹氏、東洋大学情報システム部で CAUA 運営委員の鈴木浩充氏から発表が行われた後、伊藤忠テクノソリューションズ株式会社の関口忠氏をコーディネータとし、基調講演を頂いた高田昌之氏も加えたディスカッションが行われた。

このパネルディスカッションでは、国立大学と私立大学での固有の事情の違いや、大学間での情報基盤に対する考え方の相違が議論された。私立大学の中には、アウトソーシングに比較的積極的な大学もあり、一方では、アウトソーシングが難しい事情のある大学も存在するなど、同じ情報基盤の運用でも大学によって多様性があることが浮き彫りにされた。

組織の規模が小さければ小さいほど、独自の情報システムの運用はコストがかさむことになり、もはや単独での情報基盤の運用は、経費的な面でも技術的な面でも困難な状況にある。一方で、大規模な大学といえども、経費の削減と安定した運用の狭間で多くの苦労を抱えている。しかし、フロアからの質問にもあったように、この課題は、インターネットが普及した 1995 年以来、長い期間に亘って抱えてきた課題が依然として解決されていないという現実を示してもいる。今後の大学の情報基盤の運用に向けて、多くのことを考えさせられるパネルディスカッションであった。